

北部ウガンダ紛争とアチヨリ地域における共同体浄化儀式（現地レポート）

著者	榎本 珠良
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	134
ページ	32-35
発行年	2006-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047295



北部ウガンダ紛争とアチヨリ地域における 共同体浄化儀式

榎本珠良

●はじめに

二〇〇四年一月、国際刑事裁判所（ICC）は、北部ウガンダの状況への関与の開始を発表した。ICCにとって最初の関与となった北部ウガンダでは、一九八〇年代末から政府軍と神の抵抗軍（LRA）との戦闘が続いており、そのなかで行われてきた行為はまさにICCが管轄すべき行為であると思われる。しかし、関与開始直後から、ICCは予期せぬ批判と反発に直面することになった。しかもこの批判と反発は、被害地域であるアチヨリ地域の指導者、北部で活動するNGOや研究者、北部出身の国会議員などから発せられたものであった。

彼らの多くは、ICCの正義はアチヨリの人々には正義として受け入れられない、と議論する傾向があった。その理由の一つとして、アチヨリの「伝統的」方法でアチヨリの人々にとつての正義を追求可能であり、実際に様々な「伝統的」儀式が行われていることが主張された。

しかし、論争が二極化する一方で、実際にどのような儀式が行われており、その背

景にある考え方が人々にとつてどのように理解されているか、等については議論の基となる記録は殆ど存在していなかった（二〇〇四年末までの二極化された議論の概観は参考文献①参照）。そのため二〇〇五年春以降、現地および海外のNGOや研究者らによつて一連の記録・調査活動が続いている。本稿は、そうした記録・調査を目的として、二〇〇六年三月から四月にかけて行った現地調査に基づいたものである。

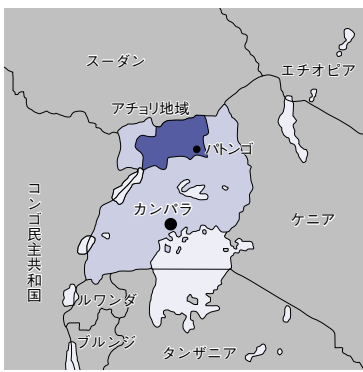
●「共同体浄化儀式」とは

本稿で紹介する「共同体浄化儀式」（Communal Cleansing Ceremony = CCC）は、アチヨリ地域において現在行われている「伝統的」儀式のなかでも比較的新しいものと言える。CCCは、家族などのレベルで行われてきた卵踏み（ニヨノ・トングウエノ）を、近年の紛争の文脈に合わせて規模を拡大したものである。この卵踏みの儀式は、教育、狩猟、その他の仕事、あるいは家出などで長期にわたって家を離れた者が帰郷した際に行われる。家を離れたものは、その間に本人にとりついた

「外」の霊を払い落として浄化し、不在によつて生まれる疎外感などの問題を解消し、家の一員として迎え入れられる必要があるとされる。使用されるものは、卵とオポボの木の枝、そしてライビと呼ばれる、又に分かれた木の枝である。卵は穢れのなさ、罪のなさを象徴し、この地域で石鹼の材料になつてきたオポボの木の枝は浄化を象徴するものと解される。そして穀物庫を開けるために使われてきたライビは、家に迎え入れ、食事を共にすることの象徴とされる。帰郷した者は、家の中に入る前に、オポボとライビとともに置かれた卵を踏む。

二〇〇二年以降、アチヨリの大首長および首長組織は、LRAの元メンバーを対象に、この儀式の拡大版を避難民キャンプのレベルで行つてきた。英語では小規模の儀式と区別してCCCと呼ばれるが、ルオ（アチヨリの人々が用いる言語）ではニヨノ・トングウエノのままである。現在、この地域では、人口の九割以上が避難民キャンプで生活しており、CCCと呼ばれるときの「共同体」は避難民キャンプ単位を指すことが多い。

図1 アチヨリ地域と調査地





列の先頭の男性が卵を踏んだ瞬間（筆者撮影）

当地域では一九八〇年代後半から紛争が続いてきた。一九八五年にオボテ政権を倒したアチヨリ出身のオケロによる政権は、一九八六年に南部を基盤とするムセベニ政権に倒された。ムセベニの軍による残虐行為に対抗しようとした北部住民や、北部に逃れたオケロ政権下の軍関係者は様々な反政府集団を形成した。一九八八年前後から、ジョセフ・コニー率いる神の抵抗軍（LRA）が反政府武装集団の主流を占めるようになったが、しだいにアチヨリの人々の支持を失うようになると、十代を中心にした若いアチヨリの人々を誘拐し、彼らを使って同じアチヨリの人々に対して攻撃をするようになった。誘拐された人々は、殺害、強かん、誘拐、キャンプの家への放火等の行為を強要される。時には自身の親族や隣人、友人などに対して行うよう強要されることもある。強要されて行った行為ゆえに、逃走したり捕えられたりするなどして帰還した後、家族や隣人などに受け入れられない者もいる。また、強要されて行った行為ゆえにとりついた霊が払い落とされない限り、本人や家族、ひいては克蘭やキャンプのメンバーに不幸がもたらされることを懸念する声もある。

こうした状況のなか、LRAの元メンバーにとりついた霊を払い落とし、キャンプの人々との共生を可能にすべく行われるようになったのがCCCである。また、LRAの元メンバーに対するウガンダの恩赦法

（二〇〇〇年）には、「被害地域の和解のための適切なメカニズムを推進する」とあり、CCCは恩赦法を補完すべく「伝統的」指導者たちがとったイニシアティブという側面もある。CCCにはアチヨリ地域からの首長や長老が集合し、参加したLRAの元メンバーは浄化されるのであり、彼らを赦し、キャンプのメンバーとして受け入れ、共に生きるべきである、と説かれる。LRAの元メンバーは、自身が浄化され、キャンプの人々に受容されることを感じ、またキャンプの人々はLRAの元メンバーを赦し、受け入れるべきことを認識する。さらに、こうした儀式を大規模かつ広範に行い、アチヨリの人々がLRAの元メンバーを赦し受容している状況を知らしめることにより、LRAのもとにいる人々の帰還を促す効果もある、とされる。

なお、CCCはあくまでキャンプ等のレベルの儀式であり、LRAの元メンバーは各自の家で卵踏み儀式を行うことが必要とされる。そしてCCCや卵踏みの儀式は彼らをキャンプや家に迎え入れるための最初のステップであり、CCCや家での卵踏みの儀式では浄化し得ない霊がつかっている者、言い換えればこれら儀式の範疇ではない殺害等の行為を行った者には、各自の状況に合わせた個別の儀式が必要とされる。個別の儀式は、各克蘭の慣習や各自が行った行為の性質などによって異なる。

他の儀式ではなく卵踏みの儀式が拡大規

模で行われている背景には、別の要因もある。まず、卵踏みの儀式は、生贄として羊や山羊などを用いる他の儀式に比べて少ない費用と労力で行うことができ、長期の紛争で疲弊した当地域で広範に行うことに適している。また、他の儀式には祈祷師などが関与することがあるのに対し、卵踏みの儀式には彼らの関与は全く必要ない。よって「伝統的」指導者と協力関係にある宗教指導者や、当地域で急速に広まりつつある新生キリスト教（ポーン・アゲイン）の信者、そして国際NGO、国際機関、欧米の国々など資金的支援を求める対象にも比較的受け入れられやすい。実際、新生キリスト教徒のなかでの意見は分かれるものの、CCCは宗教指導者からも支持され、国際NGOその他からの資金的支援も受け、当地域の数十カ所で行われてきた。

●パトンゴ避難民キャンプにおけるCCC

アチヨリ地域は、グル県、キットグム県、パデー県の三県から成る。以下に記す儀式は、パデー県の東側に位置するパトンゴ避難民キャンプで行われた。アチヨリの首長らによる儀式後の集計によると、LRAの元メンバー約一二〇〇人が出席し、キャンプの住民約二五〇〇人およびアチヨリ地域の各地から九人の首長と五〇人の長老が参加した。国際NGOのアクション・エイド・インターナショナルがアチヨリの首長組



卵を踏み終えた女性と子ども。キャンプの人々が歓迎する。右側の人々はダンサー（筆者撮影）

織に資金的支援を行い、パトンゴ地域の首長が儀式の準備と取り仕切りを担当した。

儀式は、二〇〇六年四月一二日午後二時からキャンプのなかの広場にある大木の近くで行われた。まず、LRAの元メンバーは片方の靴を脱ぎ、男性と女性に分かれて列を作った。誘拐されていた間に生まれた子どもは母親と共に女性の列に並んだ。そして木の枝とともに卵が地面に置かれた。準備が完了すると、首長らが車に乗って登場した。車を取り囲むようにダンサーたちも踊りながら登場し、首長らが屋根つき的小屋に入ってから暫く踊りは続いた。この踊りは数多くあるアチヨリ地域の踊りのなかでもボラと呼ばれ、首長などを歓迎する際などに用いられる。踊りが終わり、人々が首長らを歓迎する歌を歌った後、LRAの元メンバーが、先に男性の列、そして女性と子どもの列の順で一人一人、素足のほうの足で卵を踏んでいった。胸に抱かれていた子どもは地面に降ろされ、母親が片足を卵の欠片の上に乗せた。一人につき一つの卵を用意するのが望ましいが、予算都合上、全員が一つの卵の上を踏んだため、最後には細かな欠片がわずかに残るのみであった。全員が卵を踏み終えると、再びダンサーたちが踊り、LRAの元メンバーは近くの別の大木の下に集まり、座った。

次に、大首長の秘書役を務めている長老が儀式の意味などについて説明した。説明が終わると、余興の時間が始まった。ルケ

ミ（親指ピアノ）を使った若い男性のグループは赦しや人々の和解についての歌を歌い、年老いた女性は紛争もたらした状況を嘆き悲しむ内容の歌を歌いながら踊った。別の男性グループがHIVや援助組織、紛争の終結への願いなどについて歌い、制服姿の子どもたちの歌が続いた。そしてLRAの元メンバーによるグループが、LRAに誘拐された後の経験に関する劇を行い、誘拐された状況や、日常の訓練、戦闘などを再現した後、歌を歌った。余興が終わると、パトンゴ地域の首長によって、出席していた首長や長老、そして一九九九年恩赦法に基づいてLRAの元メンバーに恩赦を与えるために設置された恩赦委員会からの出席者が紹介された。その後、首長や長老らによる長い演説が続いた。

通常、CCCは週末に行われるが今回は水曜日に行われた。よって学校の授業を受けていて遅れたLRAの元メンバーのために、小規模の儀式が再び行われた。日が落ちるころ、参加者にポシヨやシチュー、炭酸飲料などの食事が振舞われた。人々が岐路につく頃は、午後八時近くになっていた。

●CCCへの評価と理解

筆者の調査のなかでは、CCCに対して肯定的な評価が多く見られた。CCCに参加したことがあるLRAの元メンバーへのインタビューでは、CCCの後に悪夢を見ることがなくなった、周囲に受け入れられ

ていることを感じるようになった、という回答がしばしば見られた。また、その他の避難民キャンプの人々も、CCCの後にLRAの元メンバーに対するキャンプの人々の態度が良くなり、彼らを受け入れるようになった、という回答が多かった。また、他の研究者らによる調査によっても、概してCCCはアチヨリの人々から比較的肯定的に捉えられていると言える。国際NGOなど、資金を提供する側にとっても、CCCはLRAの元メンバーの精神状態を安定させ、コミュニティとの共生を促し、「平和構築」や「社会的関係の再構築」に資するものとして理解される傾向にある。

広範に行われ、肯定的な評価が多くなされているCCCだが、それゆえの副産物ももたらした。現在、「伝統的」指導者や研究者、NGOなどが、アチヨリの「伝統的正義のプロセス」と呼ぶプロセスは、行った行為の告白、事実関係の確認、賠償といった要素を含む長期的なものである（このプロセスについては、参考文献②が詳しい）。しかし、CCCにはこれらのどれも含まれない。CCCはあくまで入り口であり、その他の儀式によって告白、事実関係の確認、賠償が必要な者は各自で行うことになっている。しかし、長期の紛争のなかで「伝統的」な考え方を理解し、その他の儀式の存在を知る人々が減少しているなかで、広範に行われているCCCを「伝統的正義」と「混同」する傾向もみられる。ま

た、首長らと協力関係にある宗教指導者らはアチヨリ地域において一定の影響力を持っているが、彼らが説いてまわるのは宗教的な赦しである。さらに、CCCと補完関係にあるとされる恩赦法の「恩赦」(英語では amnesty) は、ルオではキチャと訳されるが、この単語は「赦し」(forgiveness) のルオ訳と同一である。首長らは、恩赦法で国内司法としては恩赦を与え、「伝統的正義」による告白、贖罪、和解等を行うことを主張するが、恩赦法を単に赦すためのものと理解する人々もいる。こうしたことがあいまって、一般の人々のなかには「伝統的正義」イコールCCCのような形で浄化し赦すこと、とのみ理解する者もいる。

加えて、アチヨリ地域で活動している援助組織の活動の影響もある。例えば、帰還した人々の多くは、家族の住むキャンプに帰ったり自活を始めたりする前に、コンサーインド・ペアレンツ・アソシエーション(CPA)、グスコ(GUSCO)、ワールド・ビジョン(WV)、カリタス(CARITAS)といったNGOが運営するレセプション・センターに一時収容される。しかし、GUSCOやCARITASは、CCCやその他の「伝統的」儀式を受けるか否かについては各自およびその家族の判断に任せるのに対し、CPAは全ての収容者は「伝統的」儀式を受けるべき、という方針をとっている。また、WVは宗教的に収容者を「救済する」ことを強調し、収容者

の改宗を促す一方で「伝統的」儀式やその背景にある考え方をサタニックなものとして否定し、「伝統的」儀式に参加すると悪魔がとりつく、LRAにまた誘拐される、などと収容者に教えることもある。その他の多くの援助組織もLRAの元メンバーやその他の住民への「平和教育」等を行っているが、その内容は宗教的なものから「伝統的正義」について詳細に教えるものまで幅がある。さらに、アチヨリの「伝統的」考え方を基本的に否定する新生キリスト教系の教会および援助組織の活動も活発化しており、信者は増加している。新生キリスト教系の教会や援助組織、あるいはWVなどの教えを信じる人々のなかには、CCCを否定的に捉える人々や、「単なる文化的なもの」として実際の効果を否定する人々もいる。このような乱立する多種多様な援助組織等の活動は、LRAの元メンバーを含めたアチヨリの人々のCCCへの理解に一定の影響を与えてきたと思われる。

●おわりに

近年、アチヨリ地域において行われてきたCCCは、現地および外部の人々の期待を受け、広範に行われ、一定の支持を受けてきた。そしてそれゆえに、アチヨリの人々の「アチヨリの伝統」や「伝統的正義」への理解に影響を与えてきたと思われる。さらに、援助組織等の活動の影響もあり、「アチヨリの伝統」、「伝統的正義」やCCC

Cに対する人々の捉え方は多様化しつつある。

北部ウガンダにおける正義の論争は、「国際的な正義か、それとも伝統的正義か」という形で二極化する傾向がしばしば見られる。その一方で、実際にどのような儀式が行われているのか、その背景にある考え方が人々にどのように理解されているのか、などについての記録・調査活動が二〇〇五年から続いている。二〇〇六年九月一日現在、ウガンダ政府とLRAとの和平交渉が続いており、帰還するLRAのメンバーもみられる。近年の記録・調査活動に基づいた議論、および現地で活動する援助組織間での調整が必要とされている。

(えのもと たまら/東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

《参考文献》

- ①榎本珠良「罪に問うべきか、赦すべきか 北部ウガンダの状況への国際刑事裁判所の関与をめぐって」(『アフリカ・レポート』第四〇号、二〇〇五年三月)。
- ② Liu Institute for Global Issues, Gulu District NGO Forum, Ker Kwaro Acholi, Roco Wat / Acholi: Restoring Relationships in Acholi - Land: Traditional Approaches to Justice and Reintegration, 2005.

〔付記〕本稿は、財団法人庭野平和財団の助成による研究成果の一部である。